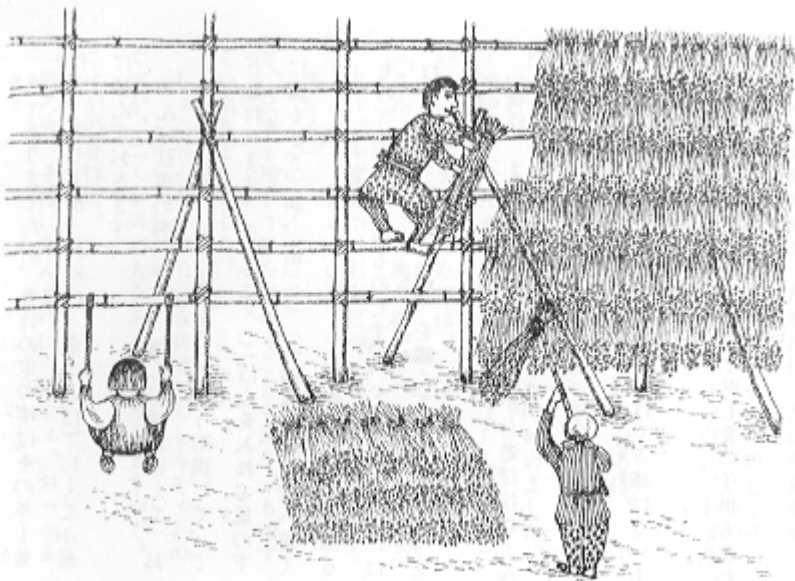


稲刈り時の子

稲刈り時になると、お父さんや、おじいさんははさ木（太い大きな木）を地面に横一列に何本も立て、それに太い真竹を横に何段も縄でゆわえて、刈り取った稲穂を干すはさばを作りました。高さは、七メートルぐらい、横幅は十メートルぐらいもあつたでしょうか。

はさばが出来上ると子供達は、だれが早く上まで上れるか競走をしたり、はさばの一番下の竹に縄をぶら下げて、ブランコを作ったりして遊びました。ブランコに使った縄は、稲束をからげる縄を三本つないで作ったので、その結び目がおしりに当たって痛いけれど楽しい遊びでした。夕方になると、大人は刈り取った稲をはさばの前へ運んできます。

すると、子供達は遊びを止めてはさばに稲を掛



ける手伝いを始めます、手の届く所は稲穂がよく乾くように、日の当たる表の方は稲穂を多く、裏側は稲穂を少なめに分けて、はさ竹に掛けていきますが、高い所は、

「ヨイシヨ。ヨイシヨ。」

と、二メートルぐらいの竹の先に稲を刺して、はさばの高い所で待っているお母さんの所まで、ほおり上げるのです。しかし、子供の力では、なかなか届かなくて泣きたくなることがよくあります。特に濡れた稲は重たくて大変でした。

このようにして、刈り取った稲が全部掛け終わるまで、月明かりに照らされながら続けました。

「もう、帰ろうさ。はらがへった。」

と親にせがむと、

「ぼう（僕）ら偉いなあ。もう、ちょっと待ってよな。今すぐ終わるでなあー。」

と、猫の手も借りたいほど忙しい刈り入れ時は、

親も子供も必死でした。

はさばに掛けた稲穂がほせる（乾く）と、はさばの下にむしろを敷いて、その上へ稲を下ろします。乾いた稲は束（稲束を六把、四段に積んでたばねる）にして、道までぼうこ（天秤棒）でかついで出し、リヤカーや、荷車に積んで家へ取り込みます。家では、それを一把ずつギーッコ、ギーッコと足踏み式脱穀機でこいで（籾を落とす）わらと籾に分けます。

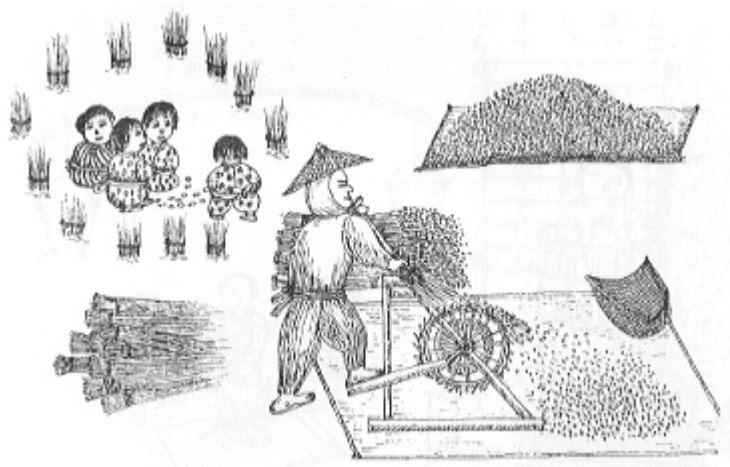
秋になると、どの家からも、朝うす暗いうちから、ツコギーッコと聞こえ、わらがたまると、四把ずつと三回積んで大きな束にし、最後の一把を二つに分けてからげるんだけど、子供は小さいので、なかなかうまく出来なくて大変でした。でも、その束をぐるっと立てて、

「あっち（わたし）の家。」

「ぼう（僕）の家。」

と言いながら、ままごと遊びをしました。

わらは、いろいろやふる場で使う大事な燃料でし



たからつし(二階)に積みました。